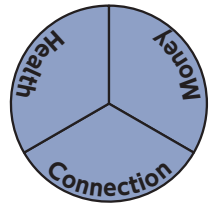


「感染防御」と「経済」は両立するのか

～新型コロナウイルスにおける二項対立問題を解く～



第一生命経済研究所 特別顧問 佐藤 慎一

彼此もう一年近く、新型コロナウイルスは世界中に猛威を振るっている。今日現在、程度の差はあれ、日本も状況は変わらない。「第一波」では、国は「緊急事態宣言」を发出、国民に「新しい日常」という名の「行動自粛」を強く求め、併せて思い切った経済支援策も講じた。そのお蔭で感染拡大は抑え込めたが、その代償は大きかった。経済活動に「行動自粛」という「麻醉」をかけたからである。「見えざるウイルス」を抑えるために「見えざる手」を封じるとは何とも皮肉な話だが、当然、経済社会は機能不全を来し、その後遺症は深刻である。その後も新規感染が増えれば「行動自粛」が叫ばれ、一進一退が繰り返されている。気を緩める暇もない。ともあれ、「麻醉」は閾値を超えると蘇生が難しくなる。「行動自粛」が求められる限り、経済社会を正常化させることは難しい。「感染防御」と「経済」とが両立できるかは、まさに二項対立的な難問である。英知を尽くした「アウフヘーベン」が不可欠である。

この難問を解くためのヒントは、次の5つのキーワードにある。

第一は、「安心」である。人は、目に見えない未知のものに恐怖を抱く。不確実だからである。このウイルスは、SARSの場合と異なり、致死率は低いものの、多くの無症候性キャリアがいつの間にか市中感染を広げていく。これが更なる恐怖をもたらす。どうすれば「安心」を取り戻せるのか。個々人の感染の有無のみならず市中感染状況の全貌がわかれば、不確実性が取り除かれる。(因みに、リーマンショック時の金融不安も同じ心理構造であった。)

第二は、「人間らしい普通の日常」である。有効な感染症対策として、「新しい日常」、とりわけソーシャル・ディスタシングが提唱されているが、これは本質的に「人間性」に背馳する。緊急対応としてはやむを得ないが、これに長く抛りかかることには無理がある。慣れてしまえば、経済社会が「壊死」の道を辿りかねない。国民が求めているのは、ごく平凡な「人間らしい普通の日常」である。

第三は、「持続可能性」である。このウイルスは社会的弱者を追い込み、淘汰し、社会的分断(格差と貧困と孤立化)

を惹き起こす。大胆な金融財政政策により下支えする必要があるが、「新しい日常」が懲り続けられる限り、それにも自ずと限度がある。実体経済デフレ、資産インフレの状況を招来しかねない。徒に新規感染の動きを後追いする形で、「ストップ・アンド・ゴー」的対応が中途半端に繰り返されれば、それによるダメージが累積化し、経済・社会・財政の持続可能性が一気に失われていく恐れがある。長引かせないことが肝要である。

第四は、「いかなるウイルスとも共生できる経済社会システム」である。「新しい日常」に慣れるということではない。このウイルス感染が終息しても、また新手のウイルスがやってくる。今回を奇貨として、「いかなるウイルスに対しても持続可能で、かつ社会的分断を招かない強靱なレジリエンスを持つ社会経済システムへの構造転換」を構想し、これを将来の方向性として国民的に早急に共有していく必要がある。

第五は、「国に対する信頼」である。今回のコロナ危機は、戦後最大の「共同の困難」(シュンペーター)であり、国の統治能力そのものが問われている。国は「共同の困難」が定義できなければならない。国に対する信頼なくして、いかなる政策も成功しない。神風は吹かない。

以上を手掛かりに、「感染防御」と「経済」を両立させるための処方箋をひとつ提示するとすれば、「どうすれば安心して人間らしい普通の生活に早く戻れるのか」という視点に立って、問題設定そのものを、「感染・非感染を早期に見極めるため、徹底したPCR検査により安心を担保し経済社会へのダメージを最小化する」という形に定式化し直すということではないか。世界的な科学的知見を踏まえて、PCR検査の位置づけを「確定診断目的」から「公衆衛生目的」に転換して、「素早く、いつでも、誰でも、どこでも、安価に」行えるようにすること、これこそが国の責任なのではないか—筆者の眼にはそう映る。

最後に、カミュの『ペスト』から一節。「絶望に慣れることは、絶望そのものより悪いのだ」。いまこそ噛み締めるべき警句である。